

反政府デモと UMNO 青年部長

福島康博*

2011年7月9日(土)、Bersih2.0のデモがクアラルンプールで発生した。数万人規模(主催者側は5万人、政府側は6千人とそれぞれ主張)の参加者に対して、政府・警察側はクアラルンプールの交通網を閉鎖、催涙弾や放水砲を使用し1,667名の逮捕者と1名の死者を出した。この結果、1987年に野党幹部の逮捕と新聞の発刊停止に追い込んだオペラシ・ララン(Operasi Lalang)、1998年にアンワル・イブラヒム副首相(当時)を逮捕したリフォルマシ(Reformasi)、2007年にインド人の権利を求めた Hindraf、および今回のデモの前身となる同年の Bersih よりも大きな犠牲をマレーシアは払うことになった。

確かに、「Bersih2.0 は選挙制度改革が目的であって、政権交代を目指したものではない」、「Bersih2.0 の前身である Bersih は、2007年より活動していた」、「デモの参加者は、マレー・ムスリムだけでなく民族横断的であった」といった点を根拠に、Bersih2.0と「アラブの春」との連続性や同質性を否定することは可能である。むしろ、中東諸国とマレーシアとをイスラームで一括りにして議論を行うのは、事態の本質を見失う危険性もある。民主化を求める中東諸国の事例、反原発を標榜する日本や欧州の事例など、各国で発生しているデモのグローバルな傾向と、マレーシアの個別事例の特徴とは、わけて考察する必要があるだろう。

さて、今回の一連の出来事においては、興味深い点がある。それは、UMNO のカイリー・ジャマルッディン青年部長が逮捕されたことである。事実関係を整理すると、まず、カイリーをリーダーとする UMNO 青年部が中心となった運動である Patriot

は、「1) PR(引用者註:野党連合のこと)にハイジャックされている Bersih の方法(目的ではなく)への抵抗を示すため、2)自分たちの民主主義の権利を実行するため」(カイリーのツイッター上での書き込み)、Bersih2.0 と同じ日にデモを実施する計画をクアラルンプール警察に届け出た。しかしながら、Patriot のデモは Bersih2.0と同様、警察からの実施許可は下りなかった。さらに裁判所より、Bersih2.0 とこれを支持する PKR、DAP、PAS の野党各党、Patriot、および同じくデモを計画したマレー系右翼団体である Perkasa の幹部91名が9日にクアラルンプール市内に立入ることを禁止する命令が下されたが、この中にカイリーも含まれていた。

そして当日、カイリーや UMNO 青年部幹部をはじめとする約400名が赤い T シャツ(Bersih2.0 の参加者は黄色の T シャツを着用した)を着てブキッ・ビンタン通りに集結、デモ行進を強行した(同じくデモを強行した Perkasa への参加者は50名程度だった)。Patriot のデモ隊はブキッ・ビンタン通りからブドゥー通りに向けて行進し、Bersih2.0 のデモ隊とわずか50mまで接近した。もしもここで両者が接触していれば、1969年の5.13事件のような最悪の事態を招く可能性もあったものの、警察(FRU)によって各デモ隊は鎮圧され、カイリーは逮捕された。彼の身柄は同日に釈放されたが、彼のツイッターへの書き込みによると、警察訓練センター(PULAPOL)に留め置かれていたという。

こうした彼の言動は、UMNO や国民世論からは

*東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

どのように評価されるのか。少なくとも本人の公式な立場としては、Bersih2.0の手法と実態に義憤を感じ逮捕も省みずに行動を起こした、ということになるだろう。これに対して警察行政のトップであるヒシャムッディン内相やナジブ首相からみれば、Bersih2.0とPatriotの双方から検挙者を出したことにより、いかなる団体・運動にせよ法に基づかない活動は取り締まりの対象であるという断固たる姿勢を示せた。しかしながら、当のヒシャムッディン内相とナジブ首相こそ、かつてUMNO青年部長を務めた経験があり、とりわけナジブ首相はオペラシ・ランの際に反野党デモを率いた(ちなみにヒシャムッディン内相は、2007年のHindrafとBersihによるデモ発生時のUMNO青年部長であった)。さらにさかのぼれば、5.13事件で華人と衝突したのもUMNO青年部であった。

今回もそうであったように、大規模な反政府デモが発生すると、それに対抗するかのように青年部が親政府デモを実施するのがUMNOの歴史である。対抗デモの実施は、時の青年部長の自発的意志によるものか、あるいはUMNOの組織的な圧力が働くのか、実態は定かではない。いずれにせよ実際においては、UMNO青年部によるPatriotがデモを行い、カイリー部長が逮捕された。はたして釈放されたカイリーに対してUMNO幹部が「お役目ご苦労」と労をねぎらったのか、実情はわからない。もしそうならば、それがUMNOにおける青年部長としての立場をわきまえた言動を取ったカイリーへの評価となろう。

これに対して、国民からのカイリーへの評価はどのようなものか。カイリー自身は否定しているものの、Bersih2.0が主張する選挙制度改革とは反対の、従って現状を堅持する立場だと国民の目に映った

と推察される。むしろそれ以上に、Bersih2.0の参加者の規模と逮捕者がPatriotをはるかに凌いだため、Patriotが霞んで喧嘩両成敗の印象が薄くなった可能性が高い。すなわち、対立する2グループを取り締まることによって政府が民族対立を防いだというよりも、むしろ政府が反政府グループを一方的に取り潰したという構図が国民に植え付けられたのではなかろうか。

改革を拒み、反政府グループよりも動員人数が圧倒的に少ないPatriotの指導者は、世論からの支持が低いとみなされよう。政府与党の仕掛ける2グループによる対立が、はからずも政府を支持する世論の声の小ささを露呈させてしまった。対するBersih2.0は、マレー・ムスリムだけでなく華人やインド人など広範な支持を集めることに一定の成果を挙げた。ツイッターやフェイスブック上には、ナジブ首相の主張する「1つのマレーシア」(Satu Malaysia)がBersih2.0のデモ隊によって実現された、と皮肉る意見もみられる。UMNO青年部長の今回の言動がどのように評価・位置づけられるかは、UMNOやBN、そして選挙制度改革の動向によって左右されるであろう。(2011年7月17日)